

Title	慶応元年における松平春嶽の上京計画とその中止について
Sub Title	The unrealized plan of Shungaku Matsudaira to come up to the Capital Kyoto
Author	河北, 展生(Kawakita, Nobuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1980
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.50, No.記念号 (1980. 11) ,p.63- 82
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	国史 第五〇巻記念号
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19801100-0067">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19801100-0067</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 慶応元年における松平春嶽の上京計画と

## その中止について

河 北 展 生

元治元年四月庶政委任の勅詔を得た幕府に、六月政事総裁職松平直克と老中等との対立から、大中人事移動があったのを皮切りに、翌年にかけて、幕府要職の激変がみられる。それに呼応して、九月の参覲交代制度の復旧の如き、諸藩の意向を無視するような、幕権回復傾向の強い政策がとられて来た。この傾向に反対する朝廷との間に立ち、調停に苦慮する一橋慶喜や松平容保等は、幕府方針に反対するということで、幕府から疑はれ、関東へ召還しようとの動きが見られた。

慶喜を頼る武田耕雲斎一行の西上に際し、幕府は積極的に西上を阻止せず、結局越前まで西上させ、慶喜をして鎮庄に出動せざるを得ぬように仕向け、対応の失敗を誘発させる策に出た。十二月二六日、若年寄立花種恭は、関白に対し慶喜東帰の許可を求めて拒否されている。勿論慶喜も、兄をさしおいて東帰して水戸藩政に介入すべきではないとし、むしろ目今の京都情勢からみて、將軍の上洛が必要であると強調し、幕閣の意向と対立した。

朝廷及び慶喜らと幕閣との対立という状況の中で、征長総督徳川慶勝は、強引に解兵を行ない、長州藩処分決定の為に、京都で諸侯会議の開かれるよう要求した。慶勝の主張は、慶応元年二月一日の尾張藩士若井鋏吉の越前藩への説明では、長州藩処分に限っての会議開催要求であるというが、会津藩は京都情勢から会議開催に反対して

慶応元年における松平春嶽の上京計画とその中止について

近日の 朝議を承るに昨年天下の政務を挙て更に幕府に委任せられければと爾來其施政を觀察するに 朝議に背馳するもの少からず殊に征討軍を發する如き国家の大事ありて大樹の進發を望まるゝにも矢張進發せられず斯くては今後は天下は如何なり行へきか実に頼み甲斐なき次第なり此上は有為の諸侯を召集して事を議せしめ 朝廷より政令を發せらるる外あるへからずとの議あるよし已にさる 朝議ある今日大樹公の上洛を閣き諸侯を召集すへしなどの議を建てられては徳川家の命脈は今日限り絶え果つべし(続再夢紀事第四一二六―七頁)(以下頁数のみ記載)と、朝廷の反幕氣運と諸侯會議開催論との關係を指摘している。薩摩藩の西郷を重用する慶勝の主張には、多分に反幕的ねらいが秘められているように思はれる。

慶應元年一月の伊達宗城宛書翰で春嶽は、

將軍家速に登京第一今後之御国是天幕御一致決定之儀は千々万々御同意ニ而候何分芋公成山容堂閣下等御出京御輔贊第一二可有之乍去弥御上洛と相成候ハ、先芋公始 朝廷より之召命ハ不宜と奉存候其訳は有志之列侯を御上洛前被為召候ハ、味方を於 朝廷こしらへ御待受等申様ニ而は方今幕府之執政始被押付候様存却而御為不可然と奉存候夫よりは將軍家御上洛之上 皇上親ら叡聞幕府へ事情并今後之御国是御垂問相成賀陽山階両宮始関白殿前殿下内府公右府公等執政へも御尋問之上能々幕之形勢見込通り御聞之上有志之<sup>始</sup>芋公 列侯登京之義迄御懇談相成候而 天幕和熟之上被為召候ハ、却而事因循に似て遅緩ニ候とも跡々之処 天幕之御為とも相成且早ふ決著可仕哉と愚考仕候(九十一頁)と諸侯會議開催に反対している。諸侯會議による国是の決定は、春嶽のかねてからの一貫した願望ではあるが、朝幕間に互に相手を疑う氣運の強い条件下の會議には反対しているのである。

朝幕間の不信感が愈々増幅する事に危機感を抱いた容保が、自ら東下して將軍の上洛を促そうとした時、尾張一橋・桑名・越前が連署して將軍上洛を促し、容保を援護しようとの計画があり、尾張藩から越前藩に連署参加が求められた。二月一日越前藩は連署参加を拒否している。おそらく、幕閣が慶喜慶勝に疑念を抱いている際、これに同調する事は、幕閣

の京都への疑惑をより拡大し、將軍上洛の実現を一層困難にすると判断した為であろう。

春嶽がまづ緊要な事と考へたのは、幕閣の慶喜排除運動の防止である。立花種恭が慶喜帰東を要求したとの報に、慶応元年一月二九日付近衛忠熙宛書翰で、

何卒大樹上坂迄之処は中納言滞京之降 勅被為在度左候得は 朝廷にても御安心之御儀中納言も難有可奉存候諸藩亦

安堵ニ歸し可申と奉存候只今中納言京師を離れ東下候而は弥西東之御情不通ニ可至歟と不堪杞憂奉存候 (二二頁)

と述べている。慶喜への在京勅命があれば慶喜が有難がるといっているのは、「方今関東之模様一変之折柄ニ候得は中納言参府候ハ、如何様之所置可有之哉も難計」(二四頁)と山階宮に書送っている様な情況判断を持っていたためであらう。

春嶽がかねてから非難している幕府私政の傾向が強まっている江戸幕閣の情況について、直接これを非難する言動をほとんどしていない。僅かに「幕府日々流弊奸猾之趣」(伊達宗城宛書翰)とか「只々追々時勢変遷水長騒乱も有之加之万事御改革被

仰出日夜御案勞申上候畢竟小生勤役中不行届故之儀ニ可有之哉と恐懼汗顔之仕合ニ御座候」(勝海舟宛書翰)と述べている程度である。政事総裁職時代の幕政改革が全面的に否定された現状から、幕閣への期待感を失い、そのために幕政批判をしていないように思へる。改革を共に行なった慶喜の東帰が、幕府から処罰される可能性を考へたのも、幕閣への不信感のあらわれであらう。

慶応元年二月五日と七日に本莊宗秀阿部正外の両老中が、幕兵多数を率いて上京した。諸藩兵の禁門守衛と交替する事で幕威を示し、諸藩の京都手入を押へ、京都側の將軍上洛運動を中止させたり、慶喜らの東帰を図るのが目的であった。このような情勢の中で、事態解決の方策としての諸侯会議開催論が強まって来た。春嶽は前述のような朝幕対立情勢の他に、

只今京都へ幸良閣下僕等参集候而も第一之橋公昨春之如き之思召ニ而は迎も六ヶ敷橋公之御心中不相替様にも承り申候 (七二頁)

慶応元年における松平春嶽の上京計画とその中止について

と慶喜にも期待出来ない事を述べている。

慶喜が前年の朝廷参予諸侯嫌悪の気持を変へていないにもかかわらず、それでもなお春嶽が慶喜在京の必要を力説しているという事は、幕閣に対する不信感の方がより強いことを示しているものと思はれる。朝幕対立の深刻化を心配する余り、次善策として慶喜に対する朝廷の信頼感に依存してでも、將軍上洛の実現を希望したものと思はれる。

## 二

幕府の慶喜東帰運動は、慶応元年二月の本荘阿部二老中の上京時、慶喜の拒否と朝廷側の強い反対で中止された。徳川慶勝の長州藩降伏の報に接し、幕府は長州藩主父子及び五卿の江戸召致を慶勝に命じた。しかし慶勝は長州藩の処分は諸侯会議により決定すべきであり、江戸召致は長州藩士民の反乱を招くとして反対した。其後何度も幕府は江戸召致を命じたが、慶勝は反対し続けた。

幕府は大目付駒井朝温、目付御手洗幹一郎に長州藩主父子の護送方を命じたが、実行困難を知り駒井が辞退し、代った神保相徳も辞任、更に塚原昌義の辞意を押し止めて出発せしめるという状況であったし、長州藩主父子護送の為に兵力提出を命じた諸藩からも、反対意見が述べられるということで、幕命は実行されなかった。前年発令した参観交代制及び妻子の江戸居住の復旧令も、諸藩は種々の理由をつけて実行しない藩が多かった。

右のように、幕閣の意図とは逆に幕命は遵守されず、幕威の低下は明白である。そうした中で朝廷から將軍の上洛が強く要求された。幕府は京都が反幕傾向の強い事を考へ、何としても將軍上洛を拒否し、幕威回復を実現した上で、京都をも庄伏し得る状況になってからの上洛を意図した。このため慶勝から長州藩伏罪の報を受けた一月十五日將軍進発の中止を発表したのである。

朝廷は二月本荘阿部両老中が上京すると、二月二二日両人を参内させ、將軍上洛の遅延を非難し、阿部を東帰せしめ將

軍上洛の促進方を命じた。三月一日朝廷は薩摩藩等からの入説を容れて幕府に対し、長州藩主父子及五卿の江戸召致と参覲交代制度等の復旧の中止を命ずると共に、將軍上洛の督促を行なった。朝幕間の対立が決定的になる危険を感じた慶喜らは、先に朝命で大坂に下行した本莊老中を東下させ、切迫した京情を江戸に伝える事で、朝廷から正式に將軍上洛命令が発せられるのを喰止めるという状況であった。

これに対し江戸幕閣は、三月八日阿部正外が歸府し將軍上洛の必要を主張したが全く採用せず、三月九日容保に対して、將軍上洛し難い事の了解運動を行うよう指示する状況であった。朝幕対立の深刻化する三月一八日、慶喜は長文の書翰を春嶽に寄せ、幕閣のかたくなな態度から、朝幕関係の悪化している事を説明した後に、

公武之御齟齬今更ニは無之候得共一事相生候度ニ一事之御不都合相生し所詮終始御一和と申処如何と懸念仕候此模様ニ而は当職ニ罷在候而も実ニ其甲斐なき事ニ被存甚恐入候（八〇頁）

と苦衷を述べ、辞意をほめかしつつ、事態打解についての春嶽の意見を求めている。

慶喜が春嶽に何を求めているのか明確ではない。朝幕間の対立が決定的段階に来てしまつて、幕閣に改変を望み難い事を告げている点から推測すれば、京都側或はその背後にある薩摩藩と親しい春嶽が、朝廷側に働掛け、多少でも譲歩を引出すよう周旋する事を期待しているのではないかと思はれる。慶喜が、朝廷が阿部更には本莊に將軍上洛を督促している点を明記していない点は注目される。

慶喜の書翰に対し、三月二七日春嶽は長文の返事を記している。長州問題については、幕府の処置が不当であれば、長州藩は愈々割拠体制を強化するであらう。その意味で慶勝の建議は至当と思はれる。本莊・阿部老中上京以来の情況は、朝幕双方の様子を十分知らないから、打解策は考へつかないと云ひながら、

尊公御後見職中老生汚重任候時分とハ諸事御旧套ニ被復御改革等も有之何分太平を粉飾する庶議歟と奉拝察候

昨春御上洛御参 内之節於 天前大樹公御始列候へ以 宸翰之御告諭ニも 叡感被思召候参覲割諸家妻子帰国帰邑之

慶応元年における松平春嶽の上京計画とその中止について

儀杯も再旧例ニ復し候杯も<sup>其他不</sup>御一和之障りと相成居候得共矢張幕廷を御憐愛之 天慮ニ而御上坂御催促杯も畢竟尊公御在京被為在候故ニまだも 朝廷之御中隔絶ニは至兼天下太平之命脈断截ニ不至候

幕府は方今之勢如斯ニ候とも尊公会侯桑侯長く御滞京にて御施術御周旋無之候而もよろしく此儘御腰を御据へ 天意被奉被為入候得は天下之人心崩壊も致不申今後紛乱等有之候而も御鎮庄出来 天幕之御一和再ひ整ひ候期も可有之歟

(八四頁)

と、幕府の現状が改善されない限り 公武の対立は解消しない。しかし慶喜等の在京が公武間の決裂を僅かに防いでいるのだから、このままにして、幕府の変化を待つ以外に方策は無いと主張している。

三月一七日幕府は先の進発中止令を訂正し、

京師より被仰進候儀も有之ニ付此度御上坂之儀仰出候然ル処未長防其外御処置も有之ニ付而は御発途は暫御見合被成候(七六頁)

と上洛拒否の態度をやや軟げた発表をした。幕府が、長州処分問題を片付けた後に上洛をとしているのは、(一)対京都対策上有利な情況を作るといふねらいの他に、(二)幕府内部の反対論者に対し、長州藩が簡単に幕命に応じない現状では、將軍上洛は云はば空手形に等しいものである。表現は上洛となつてゐるが、実際は依然上洛拒否である、との理由づけによる説得をも意図したもので、上洛反対論との妥協的意味合を感じさせる。

幕閣の内情については、勝海舟より西郷が聞いたとして、元治元年九月一六日付の大久保宛の書翰に記しているような幕吏も余程老練いたし何方に権の有るとは知れぬようにいたし成し一同して持ち合い居り候姿に御座候 其の内にても諏訪因幡と申す者魁首と相聞得申し候色々正義を立込み候えは 御尤と同意致し 何となしに正論の者を退け候に付き迎も尽力の道これなきとの訳に御座候(西郷隆盛全集一三九七・八頁)

という状況認識は、春嶽も持っていたものと思はれる。その実権者については、慶応元年二月二三日付の伊達宗城の書翰

では、諏訪忠誠だと述べているし、三月二四日秋月右京亮宛の書翰で春嶽が、

〔阿部正外〕  
豊州帰東之後又松前豆州も出勤ニ相成候と申事当今如何之廟景に而候哉

方今於幕廷執権は水泉松豆諏因酒飛等と奉存候尚又内諭相伺申候〔永野忠精、松前崇広、諏訪忠誠酒井忠毗〕（七七―九頁）

と書送ったのに対し、二五日付の秋月の返書では、

再度征長之儀被仰出候と申風聞夫故其節相加り候稲葉閣老永井主水正も登營無之候其外登營見合之向大分有之候

松前閣老は出勤ニ相成申候一同驚入申候（九二頁）

と、幕府内部に動揺がみられ、阿部正外帰府により、その前上京して將軍上京命令を受けて来た松前崇広が出勤していなかったのに急に出勤するようになったと報じている。

三月二二日関白から阿部正外に、帰府後の將軍上洛問題の経過報告を求めた事などは、動揺しはじめた幕閣への大きな圧力になったものと思はれる。同二六日朝廷は容保に対し、將軍上洛は家康二五〇年祭後まで猶予する代り、大老酒井忠績と老中諏訪忠誠の上京を下命した。幕権回復派の中心人物をおさへ込むのが朝廷側のねらいであらうが、朝幕の対立を決定的にしてしまう危険もある。

此の朝命の重大さを心配した春嶽は、四月一日山階宮に対し

雅楽頭因幡守兩人被為召寄候儀は如何之御趣意ニ被為在候哉当時在勤之老中は悉く上京致居因幡守は未だ上京致し不申候故被為召候御儀ニ而候哉（九〇頁）

と質問している。これに対する宮の返翰では、

大老酒井老中諏訪召候儀は 公武一和万々御沙汰之次第も候処一向く從江戸何等之御返事も不被申上御用向惣而差支随而一橋会津等之者も迷惑之次第多く人心も兎角不平何寄く上洛又は上坂なくてはと申御主意ニ候処松前白川等其他老中上洛之心配のよし尤之事諏訪因幡牧野備前酒井飛弾堅く上坂も上洛も不宜加之甚恐多密議迄も申談由内々達



天聽 天心不穩依之因幡備前被召上候 朝議ニ候得共又々復々御 之趣も有之先々大老と諏訪と被召候事ニ候  
(九八頁)

と、諏訪等ニ打撃を与へる目的の朝命であると告げている。

朝廷の策戦が奏功したのか、幕府は三月二九日、長州藩が幕命拒否すれば直に進発と云ひ乍ら、將軍發途の近い事を暗示し、四月一二日、日光での法会終了後發途する旨を發表し、四日一九日には、將軍進發期日を五月一六日と公布すると共に、上洛反對論の牧野忠恭諏訪忠誠の両老中を罷免した。幕府の讓歩というか後退により、朝幕の対決は一応回避されることになった。

三

四月一九日、幕府は

不容易企有之趣相聞悔悟も無之且 御所より被仰進候趣有之旁御征伐被遊候旨被仰出候依之五月十六日御進發被遊候  
(九五頁)

と江戸出發の期日を發表した。此の發令は、読方によっては、朝廷が再征を下命しているから進發するというようにもとれ、後日問題になるのであるが、幕権回復論からの將軍上洛反對の強い幕府内部をまとめる為の苦肉の策であった。

それはとも角として、かねて強く要望された將軍上洛が愈々実現するということで、四月二一日、会津藩士広沢富次郎が福井に春嶽を訪れ、賀陽宮の内旨と容保の書翰を持参し春嶽に上京周旋を求めた。容保は親藩一致の周旋を主張したが、春嶽は広く諸雄藩を参加させる事を考慮していない点を不満とし、幕府の様子が全く一変している事を理由に上京して周旋する事を拒否している。

慶喜や容保が外様雄藩の政局介入を嫌う気持の強い事を知った春嶽は、幕府内部の幕権回復論が押へ切られていない状

況のままに將軍が上洛した場合、長州再征の愚挙に出る危険を感じた。そこで四月晦日藩主茂昭名儀の再征直行反対の建白書を持たせ、家臣毛受鹿之助を江戸に派遣した。

建白の要旨は、長州藩士民を刺戟しないよう至当の処分をと主張する慶勝らの意見を無視して、長州再征を強行すれば、「大名之困窮万民之怨嗟」は大きく、不測の変が発生し兼ねないから、征長直行はさけ、先づ上洛して朝廷と十分協議の上で処置する事が大切であるというのである。

春嶽が再征を中止し、公武合体の爲の將軍上洛を強く要望しているのは、

此一挙よりして天下之乱階と相成愈被為 叡念候ニ至候而は臣子之情難忍難堪奉恐入候且は億兆之生靈塗炭ニ苦ミ幕府も亦今日之武威失墜し宇内之形勢土崩瓦解と一変仕候ハ、外国の侮慢を来たし如何成不測之巨患可相発も難計 皇国之盛衰安危存亡之境ニも可有之哉（二二八—二九頁）

と、内乱に乗じての外国の介入を心配している事も重要な要因の一つである。

毛受鹿之助が阿部老中に確めた幕令の内実は、

御旗本目下の氣焔御上洛とあれハ誰一人も御供すへしと申すものなき勢故御進発と仰出されしなり御休泊も伏見より直ちに大坂御着の順序に定められてハあれと実は大津伏見等京師接近の地を通過せらるゝに天機をも伺ハれずては如何にも不都合故大津より御入京御参内の上即日伏見御泊へ入らせらるへく長防の事も直ちに御討入にはなく夫々順序を履まるゝ筈なり（二四二頁）

というものである。上洛反対論者をなだめる苦心の發令で、將軍が出発さへしてしまへば、途中で予定を変更し、上京参内の上で大坂に至り、長州征伐についてもそれ〴〵手順をふむというのである。

諏訪忠誠等強硬派を排除したとはいへ、阿部ら將軍上洛派は猶弱体である。しかし、「御入京御参内の上即日伏見御泊」と云って、京都で十分朝廷と話し合う姿勢の無い事は、阿部らも亦基本的には幕権回復論者であることを推測させる。そ

の点は慶喜らも同じで、將軍上洛に際し、種々幕府への注文をつけようとの朝廷の動きに対し、慶喜らは、

只今彼是と幕議を御難問被為在候而は忽上坂も上洛も断然ヤメニ相成候左候而は天下不可救形勢ニ相成候間何卒く  
以御憐愍只今ハ何様江戸役人共失礼之書面さし上候共御貪着無之上坂之上老中被召候歟大樹上洛も候ハ、尚又親しく  
万々御尋問之上寛仁之天慈被示方可然何分く江戸狐疑深く何ゾアレガ<sup>カシカ</sup>ン上洛もヤメニ致度が大小吏之見込ゆへ其術  
ニ不陥目出度大樹公サへ上坂上洛候ハ、公武御合駭 皇国基本可相立(一四五頁)

と説明しているという。慶喜らの態度にも幕権の固持拡大の気持の強い事が現われている。形式的に上洛して直ちに大坂に下向することで、朝廷からの反幕的な注文を封じるねらいが含まれている。

西洋船ノ風聞も甚々しく上坂ニ付流言も有之候より外様又親一普代ノ大侯ニ而も 天朝より被召京師警衛御依頼可被  
遊様之御内談も候処(中略)異船参候とも長人坂<sup>ノ</sup>よせニいたし候共総督守護職所司代にて引請御警衛申上候間必く  
大侯被召候事ハ御延引願ふ(一四六頁)

と申立てている事から、慶喜らは諸侯会議に反対である事は明白で、春嶽の意図とは大きく相異している。  
それ故に進発令に対し、『続再夢紀事』は

此達書面不容易企有之趣云々とのミありて其企たる事実を挙げられさりし故公大に驚き扱は無名の軍を起さるゝもの  
か斯くては天下誰ありて其命に赴くへき実ニ由々しき大事なり(一一頁)

と越前藩が征長直行反対の建白書を出したと述べている。しかし建白書では幕令の違法性をあからさまに指摘はしていな  
いが、五月四日付大久保一翁宛の書翰で、

直ニ御征伐被仰出如何之御趣意ニ被為在候哉(中略)朝議ニハ少く違戻可致哉(一四〇頁)

と云ひ、四月二六日在京家臣に対し、

公方様御進発被仰出候件ニ付御触面長州不容易企も相聞候ニ付と申処 御所より被仰進候と申事御合点難被成ニ付右

之辺両宮橋公等へ探索（中略）早々可申上旨（二三頁）

を下命している。

春嶽の指示で慶喜らの意向を尋ねてみると、慶喜らも幕令は問題であり、「御所より被仰進候趣有之旁」の後に「御上坂之上御処置被為在其上命ニ背き候節は速に御征伐被遊」との一句が挿入される意図であらうかと、江戸に問合せ中だとの返答を得ている。然し朝廷から非難されると、慶喜らは、この際朝廷からは何も云はずに將軍を上洛させるべきだと主張して、朝廷側の譲歩を求める態度を示すのである。

將軍は五月一六日江戸を出発し、二六日駿府で、上坂の途次上京して天機を伺うと発表している。幕府がこの様な朝命への迎合傾向を見せた事もあってか、閏五月一〇日春嶽宛の山階宮の書翰は、

大樹公も去る十六日進発ニ而致上洛 天機同等の次第ニ相成候先々恐悦全御心配之光 九重ニ達し候辺と御同慶申候 一橋心痛度々乍此一会桑共為国家且は為徳川氏精々誠忠有之度不堪懇禱候併し閣老辺も出入有之先々恭順之方ニ赴候 由欣然之事ニ候何卒く在坂中段々 公武御和親治國之基本相立候様仰願候（一八三頁）

と、幕閣が京都との協調方針をとる人達が有力になったのは、慶喜らの努力による所が大きいとして、前途を樂觀している。

しかし薩摩藩に近い近衛忠房は、慶喜らが幕府の多少の不都合はこの際黙認し、全面的に慶喜らの周旋に委任してほしいとの動きには批判的であった。幕府が長州藩の伏罪にもかかわらず再征の態度に出た事に対し、詰問すべきだと主張し、慶喜らの要請を排して閏五月二二日將軍参内の折勅語を下した。しかし幕府の強い抵抗に会って勅語を引込めざるを得なくなった事について、毛受鹿之助に左の如く語っている。

朝廷よりの仰出されとあれは何事をも御請ハ仕るへけれとさては万機御委任とありし御主意に適ハすいよく今日の仰出これを奉すへしとの御事ならば御委任の廉を御取消なされ然る上今後天下の政務渾へて 朝廷より仰出さるゝ事

に遊はされたしなと殊の外むつかしき事を申出容易く其局を結はさりし故止を得ず 勅語の御書付を殿下の御手許に引揚げらるる事になり如何にも口惜しき次第なり(二〇一―二頁)

慶喜は勿論、阿部正外を中心とする幕閣も薩摩藩を始めとする反幕的勢力には強い反感を抱いて居た。その攻撃をかわしつつ反幕勢力を押へ込む為の策戦が、前引の幕府の強い態度であり、それが或程度成功したから、前述の山階宮の樂觀的見透しが出て来たのである。將軍の上京参内が無事終つて下坂した閏五月二四日、山階宮は春嶽宛の書翰で、

何卒く大坂より柳営毎々参 内老中以下大小吏毎度上京一会桑互ニ下坂 公武懇々如乳水一和候ハ、徳川中興 天朝御安心之大根本と存候(中略) 大樹公在坂中大会議有之賢侯被招候勢も候ハ、貴君ニも必く速ニ御上京其上御下坂希入候(二〇五―六頁)

とまで述べる状況であつた。

#### 四

慶喜らの朝廷工作が或程度成功し、朝廷内の反幕派が押へられた京都は、

柳営在坂中種々廟議も可被為在候処一会桑引受之奇特成一向く御国事御評定も御間遠御用辺も総而く御静謐ニ候此上段々 公武御一和万々平穩ニ相成候様千々奉祈禱候(二三七頁)

という状況である。六月一七日幕府が、吉川監物等を大坂に呼出し糺問の上、長州藩の処置を決定したいと奏上し、朝廷の許可を得たのは、再征対派の非難を柔らげると共に、何とか再征の勅許を獲得する為の布石であらう。それはとも角として、一応朝幕間の平穩な情況が展開すると、公武合体策としての諸侯会議が開かれるのではないかとの観測が出て来るのは当然である。

久光春嶽上京の風説が流れているとの山内容堂の書翰に対し、七月一〇日春嶽は、

これをミテ呵々芋の上京は決而無之事なり僕頻年之奔走ニ失目的方今別而前途茫茫上京仕候筈なし(二三五頁)  
と強い調子で上京を否定している。春嶽の意図と異り、諸藩を排除し幕権の回復を意図する慶喜の運動が成功している京都では、周旋の甲斐はないと考へていたのであらう。九月二日伊達宗城に対し左の様な考へを述べている。

公明正大幕府は第一にて天下之諸有志ともに諸有志は有志の列候なり事を議し天下と共に天下を治メ幕府を輔翼し君臣の名分を明らかにし公武の御合躰大本を建立し開鎖を明かにせんと存申候尤幕府も今之幕府に非らず幕府へ人材を撰挙し大久保越中勝安房杯を始夫々可有之幕癖幕習のそかすんはあるべからず是は僕計り之考にて御懇命ゆへ吐露決而他言御断申上候如仰依然参予之面々忌嫌ニ可有之候右故不被為召候事と奉存候橋公も中心忌嫌ニ可被為在(二三八頁)

幕府私政の幕習を改め、諸侯会議により幕政を輔翼する形の公武合体を念願する春嶽にとって、慶喜や幕閣の現状には賛成出来ないのである。幕府の協力なしには公武合体は成功しないから、上京はあり得ないと強調しているのである。

吉川経幹等が上坂を辞退すると、幕府は代人を九月二七日迄に出頭する様に、応じない時は再征すると発令した。再度の上坂命令を長州藩が拒否した時、幕府が再征許可を朝廷に願出れば、朝廷はこれを許さざるを得ない。長州再征の大義名分を獲得する事で再征を有利にし、幕府の権威を高めようとするのが、慶喜や幕閣のねらいである。

九月一五日將軍は再征の勅許要請のため上洛した。薩摩藩の大久保市蔵の必死の反対運動のため、將軍の参内日が延び、二一日將軍は参内し、結局再征は勅許された。勅許の情報は二四日福井の春嶽にも届いた。

九月一九日付の近衛忠房の書翰が二二日届いた。近衛は外国艦隊が大坂湾に渡来したとの情報を告げ、

此儀開關己来未曾有之難事何卒此節は大諸侯を被召寄衆議仰願候より他ニ愚存無之候何卒方今形勢ニ付而は押而登京被成候義は難相成哉(二六六―六七頁)

と春嶽の上京を切望している。

外艦渡来と再征勅許という事で、九月二五日、春嶽は家老以下の要職を集め評議の結果幕府が再征の實際行動に出る事

に反対意見を主張するために、春嶽自身が上坂すべきであるとの結論に達し、十一月を期して出発する事になった。その間の藩議の内容については『続再夢紀事』は何も記してはいない。

九月二七日春嶽は慶喜と近衛忠房に書翰を送っている。慶喜は朝廷工作でほぼ成功し、幕府主導の長州再征認可方策を獲得した。これに対し近衛は再征勅許の反対も困難になった時だけに、外艦渡来の情報を好機とし、春嶽等に上京を促して来た。いわば京都で相対立する当事者への書翰であり、春嶽の考へをみる上では注目すべきものであらう。

慶喜宛の書翰では、外艦渡来の事には触れず、征長問題に関してのみ論じている。即ち長州初征が簡単に長州藩の伏罪で片附いたのは、禁門変に対する天下の非難で、長州藩の士気が挫折し、激派も畏縮せざるを得なかった為であるとしている。幕府が再征を発表したため、激派が藩内人心統一の中心として有力化し、外部へ色々と働掛け、その為幕府の再征に疑問を抱き、幕府の処置を傍観する藩が出て、解決を困難にしている。これに対し征長軍の長期滞在は、市民も迷惑し怨嗟の気持を抱き、兵士の志気も崩れるという悪条件が生じている。此の際彼の団結を固める条件即ち嚴罰方針を除き、防長人心の方向を転換し、激徒の帰宿安堵すべき巢窟を暗示する事で氣勢をそぎ、幕政を一新さえすれば、二州の鎮圧は早まるであらうと述べている。即ち幕府が天下の衆望を受けるに価するよう政綱を一新する事が基本であるというのである。

近衛忠房に対しては、諸侯に上京周旋を希望しても、幕府非難の態度では成果は期待出来ない事を強調している。即ち京都の現状が「幕府御委任」の形になっているとき、幕府の了解なしに諸侯を召集しても、幕府の嫌疑を受けているから充分の成果は期待出来ない。外艦渡来で大変だというが、將軍が大坂に居るし、外国も亦妄動していないという事は、それだけ幕府の対策の効果が出ているといへる。したがって「御打解幕へ御垂問御示談可為在候御義方今之御捷徑ニも御座候半」と、幕府と対立する姿勢を批判している。近衛の背後にある薩摩藩への批判的考へ方を抱いているとも考へられる。

右の二つの書翰から、朝幕が共に公武合体の為には相手と協調するような基本的態度をとる事が必要であるとの考へを

抱いていた事を知る事が出来る。

## 五

九月二七日大久保市蔵が来福した。大久保の説明によると、幕府の長州再征に反対するため、九月一四日入京以来、近衛賀陽宮及び二条関白等へ入説の結果、市蔵説に賛成して朝廷は慶喜らに再征を中止する様申入れた。然し幕府は朝廷の意向に強く抗論して、二一日將軍が参内し再征の勅許を得てしまった。おそらく幕府は近日再征実行の挙に出るであらうが、「名義不分明」の再征強行では天下の大乱を招く事になる。久光は勿論、伊達宗城も上京して再征強行を防止するために尽力するから、春嶽も上京して久光らに協力してほしいというものである。

これに対し春嶽は、藩議によって既に上坂する事になっている。したがって大坂で十分幕府の説明を聞いたうえで、薩摩藩と協力して再征反対の運動を行うか否かの態度を決定すると答へている。直ちに賛同していないのは、前述した如く薩摩藩の諸侯会議論或は再征反対論には、幕府非難が基本にあり、朝幕の和合も朝意に幕府を服従させる事を主体としよとの傾向が強く、春嶽の公武合体論の考へ方とは一致しないものがある為である。

二八日夜大久保の許に、大坂に外国艦隊が渡来し、それとの交渉で幕府首脳陣の動きが異常にあわただしい事。二四日付で將軍から慶喜に対し「天下之重事実ニ絶言語候次第に至り候間即刻御下坂可被成候」等との連絡があり慶喜が下坂した事など、重大事態の発生を告げる連絡があった。大久保は即夜福井を出発帰京した。

二九日藩士中根新左衛門が帰福し、賀陽宮の内話を伝へた。即ち二一日の將軍参内日に大久保が賀陽宮及び二条関白に強硬に再征反対論を入説し、二条関白は大久保の入説の為に参内がおくれ、然も関白が前日の勅許内定の朝議を変更しようとした為、慶喜らが怒り、一陪臣の入説で軽々に朝議を変更する様では、將軍以下は辞職すると申立てる一幕もあり、結局再征は勅許された。大久保は再征反対論入説のとき、尾越津薩の四藩は同論で、再征には一兵も差出さない。故に朝



廷が再征を勅許すれば必然的にこれら四藩を朝敵にする事になるという論法で、激しい反対運動を行なった。したがって再征勅許の今日、大久保の不評判は勿論、同論という事で越前藩への嫌疑も頗る強いというものである。

大久保の悪評に伴う越前藩の不人気と、外国艦隊渡来による幕府の騒動との情報から、春嶽上坂の藩議の再検討が行はれた。「混乱の場合京坂の地に出られなハ意外の困難を来たす」事もあるとの中止論もあったが、「長防進軍の事の如きは一挙に天下の乱階を開らくへき大事なれば困難を避るため猶予せらるへきにあらず」との意見により、予定通り出発することが確定したという。外艦渡来では大問題は発生しないが、征長強行の方が「天下の乱階を開くへき大事」との認識を持っているという事は、越前藩としては外交問題は結局開国の方向で何とか解決がつくとの、一種の安堵感を伴った見透しを持っていた事を示すものである。

春嶽は十月一日福井を出発同夜今庄に到着した。此の時、前夜京都を出発した毛受鹿之助が同夜今庄に到着、京都の重大情報をもたらした。即ち、外国艦隊の条約勅許兵庫港先期開港の要求に対する対応策で、慶喜と阿部松前の両老中との間に意見が対立し、朝廷がそれに介入して両老中を厳譴するという事で、京坂間が大混乱に陥っている事を告げ、今は春嶽の上坂時期ではないと申立てた。

此処において福井より酒井十之丞村田己三郎大井弥十郎を呼寄せ、随従の木多修理中根雪江に、毛受も加はって再評議を行う事となった。二日今庄での評議の結果は、特に異論が出なかった様で、上坂を中止し暫く波瀾の静まるのを待つという事になり、春嶽は三日今庄から福井に帰城した。

一旦決めた上坂を急に変更中止した理由を春嶽は慶喜と近衛忠房及び伊達宗城に対して、やや異った説明をしている。慶喜に対しては、

京撰之事情承候処何か薩藩大久保一蔵弊国へ罷越儀ニ付薩と同論ニ而主張之筋も無之哉之風説も御座候由上坂仕候而も左様之案外之次第ニ而は 朝幕之嫌疑も如何可有御座哉難量

外国一条ニ付殊之外御混雜之由御承知被為在候通開鎖ニ付而は懃ニ持論御座候私共其折柄へ卒然西上仕候而は世上之見聞と申何角ニ付御邪魔ニは相成候而も御為ニは相成間敷と洞察仕候ニ付(三〇四頁)

とやや詳細に二つの理由を掲げている。山階宮及近衛忠房に対しては、

錦地より家来之内罷帰り委縷景況申聞加之尹宮御内諭之訳も有之私義ニ付嫌疑之次第一々承り迎も上坂候而も 朝幕之御為ニ不相成段申候(三三四頁)

と、朝幕における悪評から、賀陽宮の内諭があったことが上坂中止の主因であると述べている。十月二六日の伊達宗城への書翰では、征長反対の建言の為に上坂を決定したところへ、大久保が来福した。この大久保が將軍参内日に猛反対し、為に閔白の参内時刻が遅れるという事態を引起し、幕府側は勿論、賀陽宮等が、薩摩藩の行動を非難し、従って薩摩と同論だと評判された春嶽への不評判が高まった。したがって今上坂しても公武合体の邪魔になるだけだと、春嶽の上京中止の内諭があったので中止したと述べている。

薩摩藩と同論であるとの先入感から、強い不信感が抱かれている時点での上坂が、春嶽の意図とは逆の結果を招来するおそれが強い為に上坂を中止したのである。

外国艦隊の兵庫来港に端を發した慶喜と阿部老中との対策の相異は、朝廷の老中処罰論から、將軍の辞表騒にまで発展したが、結局慶喜らの周旋で、將軍は辞表を撤回し、朝廷も兵庫港開港差止め、通商条約の勅許ということで、一応問題は解決した。

従来幕府は朝廷を中心とする攘夷論に圧せられ、国内策としては攘夷策をとる事としながらも、対外策としては開国策をとらざるを得なかった。この相反する両面政策の為に、幕府は常に苦境に立たされ、必然的に幕威を失墜する事が多かった。また公武合体の最大の障害にもなっていた。したがって通商条約の勅許は、春嶽ら公武合体論者にとっては公武合体実現に明るい見透しを与へる朗報として受取られたはずである。それだけに早速諸侯会議開催の声が出て来る様にも思

はれる。ところが条約勅許のことを知った春嶽は、一〇月九日慶喜に対して、条約勅許の事を喜ぶと共に、条約改正を行うとの点について、具体的提案を行なっている。

幕府が改正原案を作り、それを朝廷から諸藩に諮問して決定するというのでは、「喧囂而已ニ而容易ニ御片附ハ六ヶ敷」と反対し、原案作りの段階で、幕吏と共に諸藩士を参加させれば、諸藩士も十分実情を知り、成案に無駄な反対がないと云うのである。

是迄之幕私幕利は御脱却ニ而天下合同純一之正義ニ不相成候而は一旦之処は事鎮り候而も再度之惑乱眼前之儀と奉存候(三三〇頁)

と、基本的には、幕府が従来の幕府私政固執態度を改める事が大切である事を強く主張して居る。

一一日毛受鹿之助から、山階宮との内談の詳細な報告がなされている。その会談における毛受の言動は、おそらく春嶽の考へと一致するものと思はれる。

幕府が諸侯会議の召集を直に実行しないのは因循だとする宮の非難に対して、毛受は、

只今諸侯を召し候時ニハ無御座奉存候、此度之儀ハ、先ツ橋会之力にて、爰迄行候へとも、是よりハ幕府と橋府との間甚大事にて、唯今申候而も 幕吏においてハ橋公之被成方悉く御尤とハ不存 公方様をとふ被成ルのしやと御案事申天下之侯伯も橋公へ寓目致し居候時にて、幕橋いまた混淆とは難申 此間ニ諸侯ヲ召候而も、其詮ナク 却而紛紜を生し候而已と奉存候(越前藩幕末維新公用日記、二三〇頁)

と答へている。幕府内部が未だ慶喜派と將軍幕閣派の対立のわだかまりが残っている時期に、諸侯会議を開催しても実効は揚らないとして、会議開催に反対している。宮は更に、現將軍では征長も果敢取らぬから、慶喜を副將軍にしようとの議案が中止になった事について不満を示されたのに対し、毛受はむしろ沙汰止みになった事は、幕府内部の混乱が防止出来たと有難い事であると云ひ、

此上ハ橋公会侯ハ自分之徳ヲ包 功を隠し長敷被成居 功者閣老ニ譲られ候か第一之緊要之事にて 聊にても自分功名之儀有之候而者不相濟存候。何卒 將軍にハ早速参内御座候様 朝廷より御沙汰被成下 所勞も御内使にても被下御懇ニ御尋嘸々何角と心配にて 大儀と能々御慰諭被成下周防守壹岐守へも 殿下ニ而も御慰勞被成下 扱殿下へ閣老ヲ召、此上ハ天下之事如何可致哉と 惴々として御相談被為在 其上閣老より橋公へも御談事被成下様申候ハ、橋公も如此御三方膝を合せて之御大儀ニ相成候ハ、始而万事御熟談にも可相成 二席三席と数重り候ハ、嫌疑も解可申幕吏ニおいても扱ハ朝廷にても 徳川を御見捨なく 將軍をも御慰勞被成 幕吏も御捨不被成事と安堵致し 始て活に向ひ可申 其上ハ諸侯ヲ召候而も随分御詮も可有御座哉(越前藩幕末維新公用日記二三一頁)と述べている。

朝廷側の幕府批判の態度に対して、幕府内の対立する一方を支持することを排し、將軍中心に幕府を統一させる為、朝廷が積極的に幕府への協調をすすめ、両者の懇親が深まってはじめて諸侯会議を開催しても成果を期待出来るのだと主張している。

以上考察して来た如く、慶応元年の春嶽の言動には、一見矛盾がみられ、無定見かと思はれるものがあるが、彼の言動の基底には、朝幕間に共に協調して行こうとする気持がなければ、公武合体は望み得ない。諸侯会議は形の上では確かに公武合体の具現されたもののように見えるが、朝幕いづれかに相手を押へ込む口実として利用する意図がある場合には、かへって政局を混乱させる原因になるという現実的影響面をも鋭く見抜いている面がみられる。それ故に一見矛盾するかの如き現実対応をしているのである。その意味で、慶応元年という年は、春嶽にとっては誠に不満と不安の多い年であったようである。即ち、幕権固執を最も強く主張した諏訪忠誠を中心とする幕閣は、慶喜・容保等を排斥しようとして、結局失脚し、代って阿部正外を中心とする幕閣が成立したが、これも慶喜・容保等と対立して、將軍の辞職願呈出という形で衝突し、これまた失脚し、次第に慶喜・容保等が幕閣内に勢力を占めては来たが、猶幕府内部の反慶喜色は根強く潜在

するという情況である。

他方慶喜・容保も亦春嶽の考へからすれば、多分に幕権回復論的傾向を持って居り、或程度方針の修正を要望せざる得ない態度をとっている。したがって幕閣及び慶喜の態度に不満を抱く薩摩藩が、朝廷に強く働掛け、朝廷内部の反幕的公卿が、しばしば幕府非難の言動を行なうという情況である。右の様な好ましからぬ情況であるため、春嶽の言動も亦複雑にならざるを得なかったのであらう。